

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	“なまいき”について
Author(s)	小林, 照子
Citation	国語教育思想研究 , 29 : 21 - 31
Issue Date	2023-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053956">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053956</a>
Right	
Relation	



## “なまいき”について

キーワード：情動、人間関係意識、上原輝男と九鬼周造

八王子市立由井一小講師 小林 照子

昭和58年9月例会の録音テープより

上原:おそらくHさんを見ていて、好感を持つ人も、またその逆の立場にいる人もね、引っかかる問題っていうのはそれなんだよ。ん～Hさんは一口にいうとスローモーである、というのもそれがかわりをもっているんだとぼくは思うんだね。もっとHさんを積極的にささなくちゃあいかんと思う。試みとしてもやらしてみなくちゃあいけない。それにはやっぱり“なまいき”っていうことについて考え方を改めてHさん自身が考え直さなくちゃあいけない。

H:生意気っていうのは積極的な姿勢、エネルギー、兒言態で使われてきた言葉でいうと情動、人間を突き動かすものが、人間にはあって、自分はそういうところが弱い人間なのかなって、自分と生意気っていうことを対峙させて考えているんですけど…。

上原:子どもの前に立つ教師は小学生の子どもの“なまいき”はかわいく見えて普通ですよ。こう言うてる。かわいく見えて普通ですよっていう、子どもとの接触の基本態度をこの先生がもっているのね。ところが、基本態度がない人も中にはいるんですよ。子どもがやるなまいきなものを見つけるとね、とたんになんか、カッとしちやうとかね。あるいはそれを、ぴしゃっと叩くとかね、という人がいるわけですよ。ぼくは、もっといえば、いとおしくなるような感情を持っていて、普通なんだけどって、こういうふうに、言っているでしょう。じゃあなぜ直感的にね、その子どものなまいきをみたらいとおしいと思えるかって、それは子どもが生きている姿をそこに示すからですよ。だから、子どもと年齢的にも、非常に離れてくると、何やってみたんなかかわいんですよ。おじいちゃんやおばあちゃんが、子どもをあんなふうに甘やかすか、って。やることなすこと、みんなかわいっていうふうに見えるからですよ。あ、斯くしてこの子は成長するっていうふうに見るからなんです。ところが、年齢が接近していると、そうは見ないの。なにを！ってこうなっちゃう。教師自身がなにを！って思うのはさ、教師自身がなにを！なにくそ！負け

るか！って思うところに、教師自身のまだ、生きる何か積極的なものがぶつかり合うからだって。そう考えることができるってことだね。だから、Hさんなんかは、基本態度っていうかね、それはあのそうやって人間は生きていくんだっていうふうな考え方をもっと強く起こせばいいんだと思うんですよ。それには、まずわたし自身が、まず生きてみなければいけないんだ。あなたはやっぱり大家に育ってね、皆から庇護されて、そしてそれが普通だって思ってる。そしてみんなから好かれる。そういうことにつとめればいいんだって、無意識で思い続けてきたんだと思うんだね。どの人からも、嫌われないようにっていうことでそうやって来たんだと思う。けども、きみの家庭環境がたまたまよかったからね、あなたっていう人間ができあがったけれど、例えば浮浪児だとかね、その最も貧困な生活環境しか持たないやつにはね、生きられませんよ。戦後の混乱期の人たちなんていうのは、とつてもそんなじゃあ生きられなかった。それは、生存競争ということを感じていたからですよ。世の中が改まったって、世の中が平和になったって、やっぱり人間っていうのは生存競争はやっているんだと思うんですよ。人に負けちゃあいけないっていうようなことを今言おうとしているんじゃないんですよ。人間は生きるっていうことはどういうことなのかって、わたしは本当に生きているんだらうかっていうような考え方を貫かなければ、生をうけている意味がないって、ぼくは思うな。ん～だからそうすると、ぼくは“なまいき”肯定論者っていうことになるわけですよ。

O:すべての生意気ですか？

上原:大いに“なまいき”でなくちゃあいけないっていうふう思うわけなんです。もちろんその“なまいき”だけは許せないっていう、この前も合宿で話をしたけれども、許せる“なまいき”と、許せない“なまいき”と、いう区別はもちろんつくだらうと思うけれども、あの一それはやはり許せない“なまいき”だって、生きたいがためにその“なまいき”をその子どもは示しているかも知れない。

O:子どもの場合だけですか？大人の場合は許さな

いっていか、大人には表われないって考えるんですか？

上原: いえいえそんなことないでしょうね。それぞれ大人にだって、“なまいき”なんじゃあないですか？んー。生涯“なまいき”を貫くんじゃあないですかね人間っていうのは。だからやはり“なまいき”の定義みたいなのをしてみなくてはいけないだろうし、研究のためには、“なまいき”を研究することのためには、なおさら、少なくとも、研究段階においては、“なまいき”っていうのをこう捉えるんだっていうね、その設定をしないと出来ない。それから・・・人間関係意識っていうふうに捉えているでしょう。これなんか、大事なことだと思う。“なまいき”っていうのは、必ず人間関係意識ですよ。これは大事なポイントなんじゃあないの？だからHさんなんて人間関係意識がきわめて希薄なの。んー私は今この人とこういう関係意識をもっているんだっていう。ね。そういう思い方が少なすぎるんだよ。これは適応できるんじゃないかな？なまいきな子なんてのは、人間関係意識のきわめて強い子なんだね。それは競争しているときによく表われる。あの子が言ったから俺も言うっていう。あの子が発言したんだから、俺もここで一言なかるべからず？っていうふうに喋っていく。そういう時にHさんなんて子どもの時にね、さあどうぞお先へっていう、こういうことなんだよ。わたしは、そういうこと出来ませんかね。んー、でどうしてだろう？ってきよとんとしている子なんだよ。競い合ってる人間を見るとね。はあ～って感じで、全くそれが無いから。

H: 負けてたまるか。なんてほんとになかったなって。

上原: 金持ち喧嘩せずってやつだ。笑

H: 今になって、自分の欠損部分っていうか、悔やまれるところです。

上原: だけどもね、悔やんでばかりいる必要もないんだよ。だって人間ってのはさあ、あらゆる人たちが経験していることをさあ、全部経験してみるなんてとてもできることじゃあないよね。あの子は幸せな生涯を送ったとか、あの子は波瀾万丈の生涯を送ったとか、わたしは波瀾万丈型でありたいって言ったってそんなことできるわけではないんだよ。だからすべて体験しなくたっていいけど教師っていうのは小学校の教師っていうのは、あらゆる人間がいる、その人間がどう生きているのかっていうことと理解とそれから推察だけは、できなくちゃあ。ね。で好き嫌いでやってはいけないしね、教師ってのは。特に小学校の先生なんて好き嫌いでやっちゃあ絶対いけないね。わたしは、こういう生き

方が望ましいと思うから、こうやりだすと、そういう生き方を意識的に持っていない子どもたちはもう脱落していかざるを得ないからね。小学校の先生は、絶対にぼくは、好き嫌いにおける、自分の好き嫌いにおける何か、判断でもって子どもたちを指導しては絶対にならないね。

H: 人間関係意識のところが、ちょっと自分ではつきりしないんですけど、もっと、ちょっと皆さんから、考えていただきたいんですけど・・・。

上原: もっと具体的にいうと、今この人がね(Oさんのこと)Hさんの発言に対して、身をのりだしたんだよ。これが掴まえられる人間か、掴まえられないかということが、あると思うんだよ。ね。ぼくなんかも非常に敏感なんだよ。Oさんが・・・姿勢を変えた。そうするとそこでOさんが、意識を変えたっていうのがぼくにびっとわかるわけ。そうすると、この人はそれが、ちょっとオーバーになってくるとOってずいぶんなまいきになってきやがったとかね。ところがHさんはその逆なんです。そういうことに関してきわめて無頓着、Oさんが、こうしようが、どうしようが、関係ないよあなた。んー。

H: 彼我意識ってことですか？自分と他者との・・・。

上原: そうですよ。それから、関係意識の強い人間は、人間のしぐさ、素振りに非常に敏感です。言った言葉だけじゃなくて、人間の体から言葉がいっぱい出ているからね。それを掴まえるのに、敏感ですよ。敏感だから、こちらが予測していないことを早く言うてのけることが出来るとか、早い態度で示していくことができるわけよ。遅れた人間はそれを見てなまいきだってこう言ってるわけよ。

H: 自ずと他人の反応に敏感だから、自分の自己顕示っていうかそういうことにも出てくるってことですね。わたしはおしゃれの話に関心がない。我は我、人は人。生意気って言われたとき、自分の中に原体験がないので、自分自身研究がわかっていけるかな、最初は全然ぴんとこなかったんですね。だからこそ、自分にそれが無いからこそ、もっともっとやらなければならないって思うんですけど。

上原: 来年くらいになったら、児言態が一番なまいきなのはHさんだったりしてね。(笑)こりゃあ面白いけどね。Hさんおしゃれし始めたよ。近頃ね。やってみたらいいんだよ。んー。こんなばかばかしいことって思っていた時代があるだろうし。ところがね、人間ってのはね、一挙手一投足、これね、自分がやりたいからこうやって、手を挙げて喋っているってそうじゃあないのね。

かなり人に影響を与えているわけよ。自分がどうしたって人に影響を与えるわけよ。例えばね、非常におしゃれな人がここにいとすのでしょ。非常におしゃれな人は自分だけが、おしゃれであればいいものを、Hさんどうしておしゃれしないんだらうって思う人もいるんだよ。それはHさん自身の問題でもあるわけよ。Hさんが、おしゃれ好きな人の神経をあなたが刺激しているわけよ。わたしのことはほっといてくださいって、言いたいわけさ。言いたいけれども向こうの人にそれだけ、きみ自身が影響を与えているんだもの。そうだろう、きみが普通、並のおしゃれなんかをしておれば、その人は発言しないかも知れない。それが人間関係っていうものだよ。共存しているってことになるんだよ。

S:うちの娘が、生意気に見えることがあるんです。髪の毛の伸ばし方とか、振り方？とか…。

上原:それは、ごく初期の“なまいき”でしょうね。人間は人間関係、人間っていうのは人間の間で書くんだからね。人間っていうのは、人間関係意識をもたないと、人間ではないんですよ。で、Sの娘が、今人間っていうのは、人間関係で生きているんだ。そこに自分の存在があるんだな、って思い始めているから、髪の毛を梳くんでも、人はこういうふうに梳いているんだ。でそれを見たときにああ形がいいんだ。でこうやる。それがこちらのかんにさわり始めるわけだね。ん～。だからわたしは“なまいき”の研究なんっていうのは一つの方法としてはしぐさをとっていくのが、一番早いっていうふうに思っているわけ、ん～。

H:生意気な子どもは、獲得するものが多い。そういうのが、早いわけですね。

上原:早さを思わしてしまうから、おませなんていうわけよ。早さを思わないと、奥手とこうなっちゃうわけよ。そのあたりがもう面白いわけよ。人間評価の基準に“なまいき”論をすえている証拠だっていえてくるわけさ。

S:しぐさであるかもしれないし、ものの言い方とかね…。

上原:だから、大事な観点は人間関係意識だっていうことですね。

H:ある子どもの話、人によって、態度が変わる子どものこと。

上原:人って、態度を変えるんだね。…Tさんとか、Hさんあたりは、人にとって態度を変えるなんていう器用なことは、なかなか出来にくい人だったんだね。(笑)…だから、世の中の人がそれを見て、きわめて、

誠実な初心な人であるというわけですよ。…今日もやってたよ。TVで“いいとも”とかいうやつ。そこに出ている子が、もう30歳超えているっていう年齢の人が出てて、子どもがいるんだって言ってた。そしたら、観客が「わ～」とかなんとか言ってた。それで、オートバイ乗るのが得意で、なんかすごいオートバイ乗っているんだって言うんだね。そんな大きなオートバイ起こせる？って…起こせなかったら免許もらえないんで、起こせるって、その時に面白かったのはね、教習所で習っている時に、最初は起こせないって言ってね。「わ～」なんて、こんな格好して、やってた。ところが、その時に指導員がね、「何やってるか、おぼん、早くやれ！」って、それで、がっかりして、それから、「くそー！」と思ったから、起こせるようになったっていうんだね。起こしてもらおうと思って、かわいいこちゃんぶって、「うわ～、起こせない」なんてやってたっていうんだね。これなんかも人間関係意識だと思うんだね。人によって、態度を変えるってことですね。だから、誰にでもあるんだ。それは、ないない、なんて言ってたってやっぱそれは、あるんだ。それに、目覚めているか、いないか。又それを利用するか、しないかということなんですね。うっかり言えないかも知れませんね。あの～、そうとばかりは言えないんじゃないかあと思うのはね、人間関係意識、負けず嫌いも人間関係意識だっていえるけれども、その～きわめて素朴な人間関係意識なんですね、競争ってことだけを考えている。人間関係を競争っていうことだけで、捉えている。そういうことの場合が多いですよ。え～。ところが、負けず嫌いって子は確かにいるんだけれども、ある段階からは、あまりそれを出そうとしなくなる。それはなぜかっていうと、みっともないっていうふうに思えてくる。これもやっぱひとつなまいきになったから。もう一つ上にいったんでしょうね。人と競争するのは、みっともないなっている。それが、どうしたんだっていう気持ちもやがて出てきますからね。だから、いろんな進み方があるんだと、思うんです。子どもは、ある時までは、大変負けず嫌いだったのに、非常に物分りのいい子になった。とかね。物分りがよくて、競争するときには、人に勝ちを譲り、そういう子もおります。

S:みっともないなんてことを思い始めたら、ずいぶん違うんですよ。

上原:あ～違いますよ。

S:人間関係の中でみっともないってことを考え始めたらね…。

上原: みっともないって言葉はどういう言葉か知ってる？

H: 見ともない。

上原: そう、みっともないっていうのは見ともない。ん～。自分も含めて、その情景、その光景は見たくもない。日本人なんて、優秀なんです。日本語っていうのは非常にね、日本人の神経の細かさとかそういうもの、上手に含まれている言葉なのにそういうこと思いつかさないうようになってしまっただね。下手な国語教育やるから。

S: 兄弟で姉が弟に対して「みっともない。」って自分だけでなく、自分に係わっている何かもそういう形でのえようとす、何か。きっとそうだろうな。

上原: 男より女の方がそういう調和を、求めるのは早いってぼくは思っているけど。だから、男の気位の高いやつは、たいしたことない。けども、女は気位の高いやつは、これはなかなか直らないよ。ん～。気位が高いっていうことは、気位の高さにおいて、調和がとれているって自分で思っているわけだから。ん～。ない女性もまた嫌いだけれどね。全く極端だと思うね女性。気位の高いのとね、気位が全然ない・・・もう少し気位があればって気位も難しいですよ。

S: 気位っていうのは、位があるわけではないでしょう？自分で設定していくわけでしょう？

上原: 自分でっていうよりも、その人を見た人たちも、気位っていうのはわかるから、あの人には気位が高いってこう言うわけだね。人間は、位するんだって。やっぱ。どっかに。ここにこれだけいるけれども、みんなそれぞれ、自分の安住の位置があるわけですよ。それが位だよ。位っていうのわかる？みっともないっていうのが見ともないって、いうんだったら・・・位っていうのは、これもよくできているんですよ。馬の鞍にすることで。そういえば、一番よくわかるんじゃないの？馬に鞍を据えてそこが、居場所でしょ。鞍に位置することなんだ。自分の位置を定めて、そこに自分がいることが位するんだ。

S: かつこいい馬とか？

上原: いや、だから、鞍を据えるんだもの。わたしはここにしようって位置を決める。っていうことだからね。位するっていうのは、位しないからいけない。わたしの位置はこっけいつも思わないと。だから、昔の人は恐ろしい？んだよ、こんな小さいガキたちにさ、陣取りなんてさせたでしょう。ああいう遊びを、陣取りなんて遊びがあった。ぼくら子どもの時に。手でこうやってやっ

たじゃあないか。

S: 子どもも位する場所を、たえず求めて・・・。

上原: 求めてるんですよ。居心地がいい居心地が悪いっていうのがあるんですよ。さっきのゆうちゃんだってそう。来てしばらくは自分の位置がわからんわけですよ。どこに人間関係の位置をしめればいいのかなんて、きわめて不安定、Oさんだってやっとなんて落ちてきた。この会におけるわたしの位置はこの辺だって。それが位だよ。

S: 位をする時に、敏感な子とね、自分の勢力範囲はどうか・・・あっちの人には、うまくニコニコとして・・・ちょっとえげつとか。

上原: それは、人間関係のきわめて強い子、ん～。ところが、Hさんなんて人間関係のきわめて低い人、ということになります。いつでも、決めてもらっていたんだよ。

H: そうですね。

上原: いつでも決めてもらっていたんだ。お嬢様ここです。ってね。

H: それじゃあ、だめだってことが、最近本当によくわかってきました。

上原: だめじゃあないんだよ。ん～。人間関係意識を取り扱わなければならない仕事に入ったんだから、全く今までのお嬢さん芸ではつとまらないっていうことになるってうだけなんだ。ずう～っといつづけさえすればいいんだ。おひいさまであればいいんだ。

O: でも、こういうの取り扱っていると何だか人間がいやらしくなるような気がしてしょうがないんですよ。(笑)わたしなんかね、Hさんと対照的な気がするの。羨ましいの、逆にいうと。

上原: もうしょうがない、下々のところへ降りていっちゃったから。きわめて下賤な、だからこういう仕事は昔の人は嫌ったんですよ。だから、先生っていうのは、普通の人ができる仕事じゃあないんですよ。みんな、それぞれ好き勝手に生きやあいいんだよ。おせつかいも甚だしいってことになるわけでしょう。それを、誰でも彼でも先生になろうとすること自体おかしいんですよ。世の中で最も哀れな仕事、できることなら、人間がしなくていいはずの仕事なんだもの。それをやった。特におひいさまがやるなんてのは・・・ハハ。昔ならね、例えばおひいさまに、品の良さを教わりに皆が来るとかね。そういうご時世だったらまだいいんだけどね。そんなことはないんだね。今は。昔の教育者の一部では、そういうことが、行われていたね。

H:それまでは、小さな頃は気がつかなかった。人からどういふ風に見られているか。最近までわたしは全然そんな気はなかったんですよ。

上原:そんな気がなかったっていう、そんな気があったらさあ、言われるわけないんだもの。

S:うちの娘は、わたしと違って、小さい時からおしゃれにも敏感。幼稚園の頃から、劇をするっていうと、わたしがするわとかね、マリア様の役だったら、はりきって、じゃんけんするとか、2番目だからかなあ？ほったらかしで育てたから、認められたっていう気持ちが強いかどうか、わからないけれど、兄弟関係なんかどうですか？

上原:そりゃあ、あります。大いにあります。だって、人間関係を学ぶ一番身近な人だものね。当然なんですよ。

S:かえって、みっともないっていう感じが出てくるでしょう？

上原:でしょうね。だから、小学校なんてのはね、もったもった徹底的にそのあたりをやれば、ぼくは面白いことができると思うの。例えば、きみのとこ2番目で、そういう気性を持った子であるとうなるでしょう。そうすると、この間も、席の位置をどこにするかなんてやってたけれども、あの～、自分のクラスの子どもたちを調べ上げて、この子は兄弟は、何人兄弟の何番目の子どもである、この子とこの子が接触しやすいようにするとか、あるいは全く同質のものだけを集めてみるとかまず、一番いいことは、異質なものを集めてみてことだね。例えば、きみんとこの娘と、Hさんと同学年だったら、Hさんと一緒にやらしてみるとかね。そしたらこちら、全然そういうことできない人だから、お互いに、は～、すごいな～って感心しちゃうんじゃないの？ん～。それが、人間勉強よ。ね。人間が生きるってことは、人間を勉強することなんだって簡単にいうと。

H:兄弟関係ってすごくあると思う。わたしの妹は同じ家に育ったのに、わたしよりずっときついですね。おしゃれですね。

上原:そりゃあ下から絶えず、見ているから。あんな風にはなりたくない(笑)そりゃあそうよ。そして今度、自分なりに生きてみるだろう。そして失敗するだろう。依然としてきみの方は失敗度は少ないわけだからね、きみのような人は、いつでも人から庇護されるような人だからね。失敗はあんまりしないですよ。いや、失敗しますよ。わたしの目から見れば、しているけど、そしたら今度は妹さんの方は、つかかかっていくわけさ。簡単

にいうと、つかかり型なんだよ。きみは全然つかからないんだから、つかかる奴の方が、危険度が多いし、失敗度も多いですよ。そしたらね、どうしてわたしはこんなに失敗するんだろうって思い始めるんですよ。お姉ちゃんは何だかんだ言いながらちっともあの人失敗しないんだからってこう思い始めるんですよ。そしたらお姉ちゃん今度は、尊敬してもらえるようになるんですよ。なぜだろうって。全然失敗しないって。わたしは、わたしの人生は何か呪われている？と言い始めるわけ、女は。そこでまたそこで、また新しい人間関係意識が芽生えるっていうことなんでしょうね。

S:生意気って感じさせる時には、人間関係意識の断片がチラッとこう見えてるって受け止めていけば、いいっていうこと・・・。

上原:チラッとだから、今までの常識はチラッとでしかないわけよ。それは断片が見えて、断片の隣り合わせには何があるのかということ世の中で、新しい情報を送らなければね。いつまでたっても、チラッと見えたもので、あの子なまいきよ、とかね、いや、なまいきだからかわいいんじゃないのって言うし、いいえ許せませんって、アホなことばかりやってるわけでしょう。

S:あ、生意気って感じた時の、何が生意気なのかっていうのを、整理するっていうことですか？

上原:何がなまいきっていうよりも、必ずそれは、人間成長のそれは、少なくとも記録には違いないんですから。そうだろう。記録を断片のまま持っていったって、なんにも教育資料にはならないわけさ。それが整理されて、こういう断片を見せた時には、次にはこういう状況を表しがちなんだと、いうのが並べられて体系がついてきた時に初めて、教育資料になるわけでしょう。我々はそれをやろうと。だから、今度雑誌ができるでしょう。そうすると、職員室なんかで、あの子なまいきねとかなんとか言って先生たちが議論するとするでしょ。そしたらOさんが「ちょっと、待って。兎言態の雑誌持ってきてあげるから。」ってその先生にあげて、そしてその先生が、開いて「あ～なるほど」って言ってくれればいいんだ。

\*\*\*\*\*

上原:日本人のある種の評価であるっていうふうには、どこかで言っていると思うんだけど、日本人の人間評価の基準をなまいき度で計ろうとしているっていう、これは面白いことだって、それは粹の段階にまだ到達していないものを生なんだって言うてるから、「なまいき」って言うてるんだって。ていうことを言うてるでしょ

う。だから、粋だってことは、生きているんでね、そして、生きる姿として、かっこいいっていうふうに思うのを、粋だって、だから粋(すい)っていう字があてられるんでしょ。それが、中途半端である、っていうことでもって、“なまいき”生がつくわけでしょう。まだ粋の段階に来ていない。だから、九鬼周造さんが『粋の構造』っていう本を出した。我々は“なまいき”の構造を出さなくちゃあいかん。だから今度の雑誌は“なまいき”の構造を出したいってことだね。

S: 粋に達するまでの…。

上原: そうそう、そう考えればいい。粋の構造基礎編だな(笑)

S: 粋が到達点だとすると、出発点っていうのは、どういうふうになるんですか？

上原: ん～。わかんないな～。そりゃあ、大変大きな問題でしょうけどね。つまり人間の生理の問題として、持っているものがあるのかないのか。っていう問題だから。人間が生を受けるっていうこと自体において、っていうものを、動物はもっているのか、もっていないのかという問題。そうでしょう？今よりも、生理学がもっと進歩してなくちゃあだめだ。もっと、生物学が発達していなくてはだめでしょうね。その問題はぼくらが死んでからだ。ぼくが生きている間では、無理かもしれないけれども、九鬼周造の時代には、『粋の構造』っていう本が“いき”に売れた時代が、あったわけさ。だけでも今の時代になってくると、基礎編がもっともって書かれて、『なまいきの構造』なんていう本がどんどん出てこなくちゃあいけない。つまり人間が大人になる過程論が、そのプロセスのところ、生きている姿をもっともって現してくるっていう書物が出てこなくちゃあだめだ。『なまいきの構造』くらいはぼくは仕上げしてから死にたいと思うな。そしたら必ずもって他に、まだ、こんな問題があるって、みんな書き出すから。学校の先生が、学校の奉職者になってしまうからだめなんだよ。百年間遊んでいたようなもんだ。学校の奉職者になっちゃったから。この時代の子供も達はこう生きた。っていう資料すら残してないんだものね。これは、ほんと学校の教員が仕事をしなかった。

S: 朝日新聞の教育の時代に永井道夫さんが書いてました。今の若者は、自分が社会を変えようとするとかね、自分が社会に貢献していこうなんてことは、全然思わないんですって。「楽に暮らせればいい。」「のんきに暮らせればいい。」っていうのがね、83%っていう、感じなんですって。そういう点で生意気さもなく

なってきたって。少なくともわたしが若かった時の方が生意気でしたね。

上原: そりゃあ、そうだよ。なまいきに育てようとしなないもん。なまいきなのは、お母さん方がなまいきだからだめんだ。母親がなまいきになる必要はないのよ。母親がなまいきになるから、子どもがなまいきになれないのよ。昔のもっと賢明な母親時代は、母親はなまいきじゃあなかったもん。ね。今は本当にお母さん達がなまいきなんだ。なまいきな証拠じゃあないですか。学校の先生なんて尊敬していないじゃあないですか。母親は。今の母親なんて、まあ尊敬なんてしていないですよ。わたしだってやれることをあの先生が代わりにやってくれているだけの話。

S: お母さんの方が生きるエネルギーがあるっていうこと？

上原: いやあ～それはね、あの一、うん生きるエネルギーはあるのかもしれないのね。うん。今までそら、同じように、なまいきじゃあなかったでしょ。ところが、人間にとって、なまいきっていうのは必要だなんてこう思い始めた、わけですよ。そして、今やらなくちゃって思うわけよ。決まってんよ、今、お母さん達ね。

S: 女性なんかもそうかもしれませんね。飛ぼうとしている女性とか。

上原: だから、一つの答えが出たような気がするよ。“なまいき”っていうのは、時期を逸したら、きわめて滑稽につながるって。(笑)時期を逸したら、滑稽になるから。だってお母さんの時代は粋になってくれなくては困るでしょう。それを、なまいきになろうなんてまだ子どもじゃあないですか。なまいきじゃあだめ(笑)

S: 粋にならなくちゃあならない。お母さん達は結局、粋に達しなかったわけ？わたしお母さんの代表なんでね。

上原: 達しなかったって？いやあ、永井道夫さんが言った時代のひとつでしょ。ね。だから、子どもの頃になまいきになれなかった人達よ。だから母親になったから、もうなまいきやたって許されるんだろう。って思ってた。って、お母さん達もなまいき始めるわけですよ。だから、子どもの時になまいきさせておけば、大人になつてなまいきにならんのだ。

S: 永井さんの話、15歳になれば、元服をして、大人と認めて、何もかも解放するわけ。っていうふうなことが書いてあった。そういえば。今は、その子ども時代が延々と続いているって。

上原: だからといって、早めてみたって尚更だめだと



思う。

S:もう大人っていうのは、一つの位置なんですか？

上原:いやあ、確かに元服年齢っていうのは、昔はあった。元服年齢があつて、精神発達があつた。っていうんじゃあなくて、精神発達からいって、この年齢が、適当であろうと決まったんだよ。だから、今も15歳になったら元服してよろしいだなんて、やっても始まらない。ってことだよ。元服なんてもっともっと遅らした方がいいんだよ。だから、母親なんて、母親になれないやつがいっぱいなってる。だから、母親にならさんことだよ。まだ早いって。Mさんよく聞いて。「なんだ、お見合いなんて」こないだ電話の向こうでさんざん怒ったんだ。きみがお見合いなんて、お嫁にいけると思っているか！って、そんなこと言うから、児言態は婚期が遅れるかもわかんないけど、遅れたらいいと思うんだよ。幸せよ、今のご時世、第一、男も遅れているんだもん。適齢期がきたからっていって、かつての時代における適齢期ですよ。

S:ということは、それまでに、育てられていないってこと？

上原:そうですね。育てていない。児言態は失敗しないじゃないですか。児言態の会員は失敗しない。ずいぶん皆遅いけれども、遅いけれどもみんな、いい家庭を営んでいるじゃあないですか。

I:石原慎太郎と誰かの対談で、孫の学校で、「ちょっとお茶でもどうですか？」って言えば、ついてきそうなお母さん達ばかりだ。っていうのがありました。母親になれていないということですかね。

S:それ、なぜそういうふうになっちゃったのかしら？ どうして？ 何を知らないからそうなっちゃうのかしら？ 自分の立場、役割ってこと？

上原:まあいろんなことが、考えられるでしょうけれども、やっぱりものが満ち足りたんじゃあないの？ものが満ち足りたし、人間の生活のそうしたあれは？世の中が決めてくれるみたいだね、ところがあるでしょう。お宅のお嬢さんもう適齢期ですよ、って言ったらさ。そこらの家具屋さんがやってくるとかさ。で結婚式場はどこにしてとかさ。それにあわせてうちも、いよいよお嫁にかさなくちゃあいかないとか。マスコミの連中が煽り立てる？それにあわせた生き方をすることが人生と思いは始めるからじゃあないですか？

S:それまでに、育てていないものは、何なのかっていう。

上原:そういうことが生き方ではないって、言わなく

ちゃあいけなかったのね。だから、例えば、テレビなんかうちは、見せないんだって、いう家庭がもっともっと、増えていかなくちやあだめだと思ふ。みんなが同じようなね。ところが、みんなが同じっていうのはこれは楽だからね。だから、新聞に出てたじゃない。今の日本人は皆中産階級だつて。お粗末千万なんじゃあないの？

S:っていうのは、自分の位どりみたいなのが、漠然としているってことですよ。自分の位置っていうか、ありかたっていうか、自分を決めるって仕方が、漠然としてると考えていいんですか？

上原:自己主張とか、そんなのないんじゃあないですか？

S:でも、へんな自己主張みたいだね。

上原:あれは、自己主張じゃあないでしょう。あれは、権利だけでしょう。権利主張を自己主張と考えている。わたしも言える権利があるんだって、隣の人も言った。わたしも言えるはずだ。っていうのが、自己主張になっているんじゃあないの。隣の人が言ったからといって、自分が言わないでいるのが、自己主張なんだよ。ん～。周りが皆言っていたとしても、わたしは言いません。ていうので、初めて、自己主張なんだよ。

S:っていうのは、自分の位置を決めて、自分の言うことと、言わないことをわけて、言わないでいる。そういうのが崩れてきた。っていうのは、母親っていうのがどういのかっていうのが、自分自分で考えてやりたいようにして、母親でいいでしょ。っていうふうになっているっていうふうには、とっても感じますけど・・・。

上原:昔はね、やっぱり日本人は貧乏だったから、ついこのあいだですよ。本当にぼくはよく言うけれども、日本人は昔から豊かだったなんて考えたら大間違えだつて。ぼくらの子どもの時分なんて半数以上の子どものが、鼻を垂らしていたよ。栄養失調のためだよ。っていうことを言うでしょ。あれ戦争中だったからじゃあないですよ。ぼくの小学生時代っていうのは、戦争中じゃあないから。貧しかったんですよ。兎に角。人さまがそうしたって、あんたは、うちの子なんですよ。人さまがそうしたって、あんたがそうしちゃうかん、あんたはうちの子なんですよ。人さまがそうだからといって、うちができると思っちゃあいかんっていうのが、最低の教育だったんだから。よそはよそ。うちはうちです。っていうのが、どこの家庭でも、最低の線、それだったね。

S:例えばね、おしんとかやってるでしょ。テレビで・・・。おしんが、東京に逃げる場面を応援した。昔



は、そんなふうにしちゃあいけなかったのよね。長男の嫁とか、次男の嫁とか三男の嫁とか、崩れてきちやっただから、混乱したってこともあるわけ？

上原:そりゃああるでしょうね。家が崩れてきたってこともあるでしょうね。うん。日本人は人の教育より家の教育だったんだから。ぼくはもう一度考え直さなくちゃあならないと、思っているけどね。人の教育よりも、家の教育の方が、質が高いんじゃないかなってぼくは思っているけれどね。ん～。大体、300年平和を維持した国は少ないんだからね。その300年の中で、人間はバカじゃあないんだもの。相当なものを、みがきあげたはずですよ。それを、戦争に負けたからって、戦争をやったら、勝たなくちゃあいかんよ。戦争に負けたからって、全部ひっくり返してしまったってのはね。まあ、そのうち地震が起きるよ。そしてもう一遍やり直したよ。

E:周りを見て感じることも…。他の人と変わった生き方をすると不安でしょうがない。自分の信念に基づいた生き方をするんじゃないかと、他の人と同じ生き方をしようとする人がとっても多く感じるんですよ。以前はそうじゃなかった。戦後の特徴ですか？

上原:特徴ですね。それは戦後の特徴だと思うんですよ。そしてそれは民主主義教育が成功したんじゃないですか？民主主義教育じゃあないですか？ただみんなが、それぞれ、思い思いに生きていたかということそれは、嘘ですよ。戦前はみんな何のために生きていたかということ、家があった。家のために生きていた。上原の名を辱めてはいけな。そういう生き方をみんなしていた。男も女も。だから、次男三男以下になると、そこから外れたんですよ。気ままな生活をするんだけれども、それは、後をもらえなかった、次男三男の、その他大勢クラスだからってことなんですよ。ちゃんとした、正当な生き方は家を継いでいったものが、正当だったんですよ。ね。だから、嫁に行くんだって、そのうちの跡取りさんに嫁に行った女性と、次男三男坊のところへ行った女とはもうレベルが違うんですよ。

E:感じていたのは、日本人の特徴というかね、そういうふう感じていたんですけど、それは必ずしも、日本人の特徴じゃあなくて、それは現代の特徴ですね。

上原:そうですね。現代の現代の特徴であって、あんまり褒められた特徴じゃあない。ん～。

S:自分の位置みたいのをね、例えばわたしは自分長男の嫁だ、だからこういうやり方でいいんだ。っていうのがなくなってくると、自分をどう決めていいかわからないので、周りを見て決めていくって…。

上原:傾向あるしね、考えてほしいと思うことは、きわめて消耗品的生き方なのよ。ね。あとは、野となれ山となれなんだよね。親子せいぜい二代であとは考えていない生き方なんですよ。そうでしょ。それはどこが基準になっているかということ、家が崩れてしまったから、戦前でいうならば、次男、三男坊がそれぞれに、家を興して、うちを作った。それがレベルなんです。ん～。それはもう、はじき出された、主流じゃあないね。その他大勢クラスの者達だったわけでしょ。本家が繋がってればいいや。したっていいんだもの。ね。そういうことになるわけですよ。だから、きわめて雑な生き方をし始めた。だから、ぐらい、ぐらいになっちゃうの。ん～。

S:ほんとは、人間って自分の位置を定めたいっていうのね、求めるわけでしょう。結局そういうことが与えられないと、生意気になったり、お母さん達がね、どこで区切りをつけていいかわからないっていうの、母親っていうのはこういうものなんだっていう、区切りをね、生きていくエネルギーがあるわけなんだから、消耗したいっていうか、発散したいっていうか、求められるだけのものを求めていきたいっていうか、生し続けちゃうっていうの。

上原:だから、権利主張は絶対強くなるはずなんですよ。

S:だから、もしわたし達が気づかせていくとしたら、位置関係とか、そういうことですか？

上原:人間はどう生きていくかっていうそれを教えな。いと。

S:例えば、5年生になったらっていうのがあるでしょう。作文で。そういうふうな意識のさせ方っていうのはどうですか？

上原:必要でしょう。それは。だけれども、その時になったら、5年生になったら頑張りましょう。とかさ、そんなことだけしか、やってないでしょう。なんにも見通しがないわけですよ。ん～。それもそのはずだよね。横にぶった切られたクラスを担当しているだけだもん。1年担当したら、その次はどこ行くかわからないだもん。一生懸命やったって、次の年になったら、またクラスが替わるんだもの。だからクラスは持ち上がっていくのよ。公立学校が早くそうならなくちゃあ。もう誰だってわかることなのね。わかることなのに、それをやらさないのはなぜか、信頼されてないんですよ。教員は、そんなの、2年も3年ももたれたらどうなるか。それよりも、いろいろ替わっている方がいいって。そりゃあぼくも教育庁にいたらそうするね。ぼくは今言った説でもって、新し

く縦割り制度にしましょうなんて言わないわ。だって縦割りでもてる教員がどれくらいいるかなんだもん。今の教員で。だって人間の勉強ひとつもさせてないでさ、単位だけ取らせといてさ、人間を何年間か受けてもらえるか。

O:どこで、勉強したらいいでしょうね。人間の勉強。

上原:児言態ですよ。

S:ずっと前、Kさんにいただいた、素読の本という中に、6歳になったら、嘘をついてはいけません。っていうのがあるでしょ。ああいうのって昔は何歳になったらこれくらいっていう、そういうのは、今はすっかりなくなっているって感じですか。

上原:それは、あれだもん。成人式以外なんにもないじゃあないですか。七五三があるっていったってあれはなんにもないじゃあないですか。記念撮影するためだけにあるだけの話だろう。日本人が日本人の生き方自体を見直そうっていう気持ちがないのに、どうして人間が育てられたりするかってことになるんだよね。ぼくなんか言わせれば。日本人はどう生きてきたのかっていう勉強をしないと。できるわけがないのに。“なまいき”に戻そう。

\*\*\*\*\*

上原:そこに方法が、出ているから、こういう方法だったら、こういうことができるだろうっていう…。気っていう言葉がまだ使われていること自体がおかしいと思わないと。長幼の序ありっていつて時代だったら“なまいき”は盛んに出て当たり前だよ。今は長幼の序なんていう言葉はなくなっているのに、それなのに、日本人は“なまいき”っていう言葉を今も使うんだよ。それはなぜかっていうことなんだね。序列だとか、身分だとか、まあ言ってみれば、日本人の封建制だね。ん～。民主主義の世の中においても、封建的な意識は消え去らないんだということになるかもしれないんだよ。結果が出てくれば。日本人っていうのは随分封建的なんだああっていうのが、出るかもしれない。けども、それは封建的ではないんだろうと思うんだ。秩序を求める。っていうことなんだと思う。仮に出てきたとしたら。

S:さるもボスざるとか。

上原:そうですね。

S:どこかで、秩序がないと、安住できないと。

上原:そうですね。“生”ってすごく生理的っていうふうに言える？だからそういう論理からいくと、“なまいき”っていうのは、ある一種の秩序論でもあるだろう。っていうことだね。現代人における秩序論が出るかもしれな

いんだね。「なまいきな子」の特徴を挙げてみてよ。「なまいきだ。」って言われる子にはこういう共通性があるなっていう。「なまいきだ。」って言われない子における共通性っていうのはこうである。持っているんだと思うんだよ、きっと。例えばHさん見てなまいきだなんていう人はいないもんね。多分いないと思うよ。来年あたりは、見ものだけだな。

S:生意気の特徴っていった時、人の顔をうかがうとか？

上原:もっと性質的なもの。それは知りたいと思うんだね。ぼくは。あるような気がするんだ。

S:ぱ～っと何かやるけれど、長続きしないとか？性質っていうとどうかな？暗いとか？

H:臆病だと生意気になれないような気がします。

E:すごく、デリケートっていうか、繊細ですよ。

上原:神経質な奴がなまいきでない、なんてことはないよ。

S:根が暗いっていうのもそういうのもある。

上原:例えば、もっと簡単にいって、おっとり型なんっていうのはさあ、なまいきじゃあないでしょう。だから、なまいきをやる子でもいろいろある。例えば、「世知辛い子、せこい子もなまいきを示すことがある。」とかね。絶対だといっていいのは、「おっとり型には、なまいきな子は少ない。」

S:生意気と感じている娘さんについて…浮き沈みが激しい。

Y:自分の弱みを見せたがらない。ん～。

上原:「情緒の安定度の高い奴にはなまいきな奴は少ない。」「情緒の不安定な奴には、なまいきだと言われることが多い。」とかね。「感情の起伏が激しい奴は、なまいきだと言われることが多い。」とか。

S:我を忘れるっていう。没我性とかいう…。自分の位置みたいなのがわかんなくて、こっちへガーッと走っちゃうことがあるからなんてちょっと思ったんですけど。

上原:今言った例なんかは、合宿の時にちょっと出たけれども、許される“なまいき”なんでしょうね。だから、年齢の非常に低いところではある。けど、そんなものは、「なまいきね。」って笑ってすます。こちらの神経に引っかかってこないから。だから、年齢をどっかで区切る必要はある。ってことだよ。この年齢になってそれをやったら、「全くなまいきだ。」っていつてそしられると。そういうこともあるでしょう。

S:この年齢では、すごく生意気だけれど、この年齢

では当然とか。

上原:このっていうのは、上の年齢ではないよ。年齢が発達するにしたがって、“なまいき”は評価が非常に厳しくなってくるはずですよ。細かくなってくるだろう。下へいけば、おおまかなんですよ。下の間は、なまいきだっていう捉え方も非常におおまかで……。

(テープ終了)

「生意気」表記について

塩見さんのテープ起こしには、一律「生意気」と表記されていましたが、上原先生が言われている「なまいき」のニュアンスを大事にするため、(後に、上原先生は「なまいき」、「なまいき」と表記されていた。)小林の判断で、上原先生の発言内の「生意気」を「なまいき」と「なまいき」に書き直してあります。

## 解題

この会議録は、昭和58年9月例会の録音テープを起こしたものです。例会に参加していた塩見さん(旧姓 恩田)が、24年後に文字化し、会員に届けてくれました。終わりに添えられていた文章を紹介します。

「このテープ起こしは、何だか自分のために上原先生が、メッセージをくださったなあ。という感があります。例えば、人間が生きてってどういうことなのか、私は本当に生きているだろうかという考え方を貫かなければ、生を受けている意味がない。ということ。私は、自分をまだまだ押し付け型の人間であること。そして、ただいま、とつても生意気な、長男の嫁もどきをやっています。早く粹なおばさんねって言われるように成長したいと思っています。」

この時期は『児童の言語生態研究12号』(昭和60年発行)の特集研究「子どものなまいき」に取り組んでいる最中でした。上原先生は度々、会員の生態(性格や行動など全て)をたたき台にして、その時の研究テーマを語られました。たたき台にされた本人にとっては未来が拓けるか否かの大問題ですが、その分析、評価、展望は、単に一個人の問題ではなく、国語教育の今日的課題でありました。そして小学校教師が子どもを育てる専門職となるための必須条件について繰り返し語られました。

「小学校の教師っていうのは、あらゆる人間がいて、その人間がどう生きているのかっていうことの理解と推察だけはできなくちゃね。」上原先生からそう言われても、その理解と推察が難しく、暗中模索が続きました。「こどものなまいき」についての研究成果は12号に掲載してあります。上原先生の予想は大当たり。“なまいき”に焦点を当てたことによって、アンケート調査結果にも、研究授業での発言にも、子ども達の間関係意識が変化する実態を、はっきりと見ることができました。ターニングポイントは4年生。特に女子に生意気度が強く見られたのです。

九鬼周造は、「いき」を、「垢抜けして(諦め)、張りのある(意気地)、色っぽさへ(媚態)」と言っています。上原先生は九鬼周造の「いきの構造」を基にして、「いき」になりきれない段階を“なまいき”と捉えました。日本人が子どもの成長を見守る際に、“なまいき”という捉え方をしていることが重要だと主張されました。“なまい

き”という、日本人にとっての身近な生活感情の中に、子どもの「対人関係意識の成長」を見ようとしたのです。

児童の言語生態研究の歩みを振り返ると、1968年に創刊号を発行してから、1980年までの12年間は、「思考・感情・構え・用具言語」という4分野の内容を明らかにしつつ、それらが国語教育の中心となるべき意味を確認する期間だったのだと思います。上原先生に怒られながら12年間でなんとか10冊の雑誌を発行しました。

「日本人が日本の風土で生き続けてきた謎の答えは子どもたちの中にあるんだよ。子どもたちからそれを見いだすのが、君たちの仕事なんだから。子どもたちに近いところにいる君たちなんだから。それがどんなに貴重なことなのかを忘れちゃダメだよ。」小学校の仕事が忙しいことを言い訳に、私達がなかなか研究を進めることができずにグズグズしていると、必ずこう言われました。上原先生の言葉には厳しさの中に未来への光のようなものがあって、そう言われると、自分の力は及ばなくても元気になれました。そして、自分の教室で上原先生のアドバイスの通りに授業をすると、子どもたちは必ず目を輝かせました。

雑誌11号「子どものけんか」12号「子どものなまいき」13号「子どもの泣き」この3冊を発行するまでに8年間かかっています。研究のスピードがさらに遅くなったことは否めませんが、上原先生が求めていた生態研究を進めるために時間がかかってしまったというのも事実です。「けんか」「なまいき」「泣き」はどれも苦しかった。どんなに私達が苦しんでいても上原先生にはいつも強い直感がありました。そして、“なまいき”を研究していた時も狙いは的中しました。

最後に上原先生の言葉を掲げます。

「子どものなまいきぶりを見て、「子どものくせに」と思うことは、決して、「子どもである(分際、存在の意)にもかかわらず」ではなかった。子どものくせとして、その行為がある。もちろんそれを肯定しているわけではない。そうありたくないのにそうする、つまり、くせに見たとすれば、「なまいき」という意識現象は同時に措置意識を伴った人間成長の在りよう、在り方として、日本人的志向を垣間見せたものといえないだろうか。「なまいき」は日本人にとって、日本人として発達のくせであった。」